富田林市文化財調査報告46

喜志西遺跡Ⅲ

編集・発行　富田林市教育委員会

調 査 地　富田林市喜志町三丁目
調査面積　198.4㎡
調査期間　2010年1月13日～1月27日
調査担当　青木　昭和

はじめに

喜志西遺跡は、市域の北部、近鉄長野線喜志駅周辺の喜志町三丁目、五丁目および旭ケ丘町にまたがる位置にある遺跡で、東西約600メートル、南北約400メートルの推定域を持つ。

富田林市域を南から北に向かって流れる石川が約１キロメートル東方にあり、遺跡はこの石川により形成された左岸中位段丘上に立地する。遺跡の西端は羽曳野丘陵の裾近くまで到達する。

喜志西遺跡は、既往の発掘調査によって弥生時代中期から中・近世にかけての複合遺跡であると考えられているが、特に東半部では方形周溝墓を中心とする遺構が検出されている。

周辺を見ると、北東に喜志遺跡、南に桜井北遺跡、粟ケ池遺跡が近接している。このうち喜志遺跡は古くから学界で知られていたが、市街地が広がった1970年代以降に発掘調査が増加したことから弥生時代の遺構が多く検出され、中期には集落でサヌカイト製石器の大規模な加工を行っていたことが明らかとなっている。また、これまでの調査によって、集落周辺部において方形周溝墓が確認されており、喜志西遺跡で検出された方形周溝墓とともに集落の墓域を形成していると考えられている。

今回の調査は、民間共同住宅の建設に伴い実施した緊急調査である。

2009年8月3日に事前調査を実施したところ、密度は高くないものの遺構の存在を確認したため、関係者で本調査に向けた協議を行い、翌2010年1月13日から27日まで、建物部分198.4㎡を対象として発掘調査を実施した。

調査にあたって、事業主である福田商事株式会社ほか関係者から、さまざまなご協力をいただいたことに厚くお礼申し上げます。

図１　遺跡周辺図

基本層序（図４）

①は、表土および現代の撹乱で、調査前の解体や整地などに伴う瓦礫類を含む混合土である。

②は灰色(7.5Y4/1)シルト～粘土（＝耕土）、③は黄褐色(10YR5/8)シルト～粘土、④は黄褐色(2.5YR5/6)マンガン粒を含む粘土で、その下が地山である。遺構はすべて地山面で検出している。

調査区北西部では、②が一段低くなっており、その上に⑤黄褐色(10YR5/6)マンガン粒を含む粘質土の堆積が見られる。これは、宅地化が進むなかで、調査区東に比べて低位の水田に盛土されたものであろう。図４には表現されていないが、①の下層から掘り込まれている撹乱の存在がそれを物語っている。

また、⑥⑦はＳＸ０１の埋土である。

遺　構

調査区内は最近まで家屋が建っていたこともあり、地山まで達する土地の改変によって遺構面の状態は良好とは言えない。そのため、検出した遺構はピットなど10基にとどまった。主要な遺構については以下の通りである。

性格不明遺構（以下ＳＸで表す）は５基検出した。

ＳＸ01は、調査区北東端で検出した遺構であり、長軸で約260センチメートル、深さ約50センチメートルを測る。北半部は調査区外に延びる。遺物は全く見られなかった。

ＳＸ02は、調査区北東部で検出した直径約150センチメートル、深さ約85センチメートルで、平面がほぼ円形の遺構である。埋土は、上層にブロック状の粘土、下層に粗砂が堆積し、人為的に埋められたように見える。上層から丸瓦、平瓦が出土した。形態や埋土の状況から井戸とも考えられるが、現在は湧水は見られない。

ＳＸ03は、調査区北部で検出した直径約110センチメートル、深さ約45センチメートルの遺構である。遺物は出土していない。

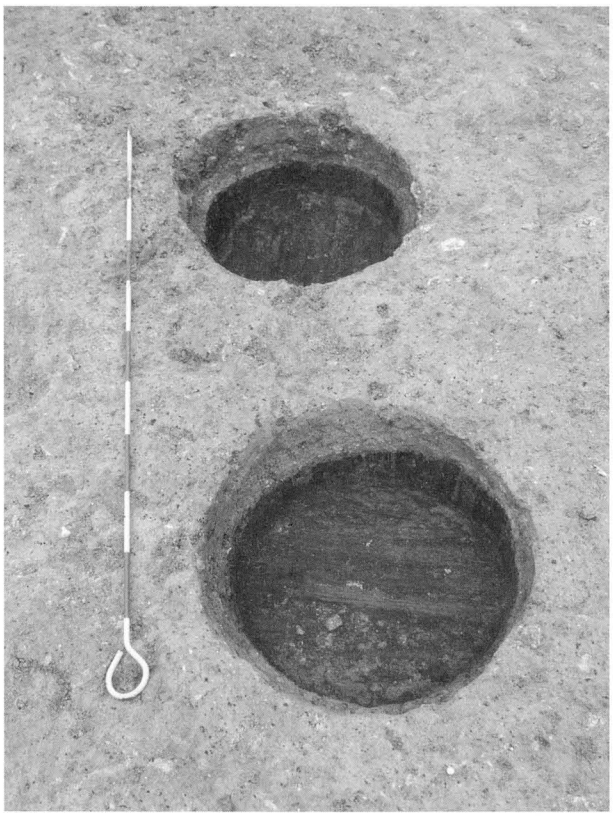

写真１　ＳＰ04（手前）・ＳＰ05（奥）検出状況

ＳＸ04は、調査区南東部で検出した長軸95センチメートルの非常に浅い遺構である。遺物は出土していない。

ＳＸ05は、調査区東部で検出した。瓢箪型の不整形な浅い遺構で、長軸150センチを測る。遺物は見られず、連続した２つのピットであった可能性もある。

ピット（以下ＳＰで表す）は５基検出した。

ＳＰ01は、調査区北西部で検出した、直径約70センチメートルの皿状に掘られた非常に浅いピットである。遺物は出土していない。

ＳＰ02は、調査区西壁にかかる状態で検出した浅いピットである。調査区内で約40センチメートル分を確認したが、形状からおそらく楕円形のピットであろう。遺物は見られなかった。

ＳＰ03は、調査区中央東寄りで検出した直径約50センチメートル、深さ約30センチメートルのピットである。遺物は出土していないが、一部木質が残っており、木桶が埋設されていたと考えられる。

ＳＰ04は、ＳＰ03のすぐ南で検出したピットであり、直径約50センチメートル、深さ約16センチメートルを測る。遺物は出土していないが、部分的に桶の側板や底板が遺存していた。

ＳＰ05は、ＳＰ04の南25センチメートルで並んで検出したピットである。直径約45センチメートル、深さ約20cmメートルで、埋土から瓦片、ガラス片が出土した。また、ＳＰ04と同じく桶の側板や底板が部分的に遺存していた。

これら３つのピットは直線状に並んで設けられており、その構造がほぼ均一であることから、同時期のものと考えられる。ＳＰ05の出土遺物から近代以降に廃絶した遺構であろう。

まとめ

中央部で検出した木桶を埋設したピットや井戸状の遺構は、比較的新しい遺構である。

調査地周辺は現在市街地化が進んでいるが、明治32(1899)年の河南鉄道(現近畿日本鉄道)営業開始以降、太子口喜志駅(現喜志駅)から旧集落に至る道が整備されると、沿道に民家や商家が建ち始める。本調査区もその沿道に位置する。

近代化が進み、人口増加に伴って居住域が拡大するにつれて、近代以降に今次調査区周辺も市街化が進展したのであろう。

冒頭で触れたように、周辺で検出された方形周溝墓群は、喜志の弥生集落の墓域を形成していると考えられているが、喜志西遺跡における周溝墓域と本調査区との間には自然流路があり、墓域とは隔絶された立地にあるといえる。（図３）

これは、弥生時代の遺物、遺構が全く見られなかった今回の調査結果とも合致する。

〔参考文献〕
富田林市(1986)『喜志西遺跡発掘調査概要』（富田林市埋蔵文化財調査報告14）
富田林市教育委員会(1993)『喜志西遺跡発掘調査概要Ⅱ』（富田林市埋蔵文化財調査報告23）
大阪府教育委員会(1994)『喜志西遺跡発掘調査概報Ⅲ』
富田林市遺跡調査会(1996)『喜志西遺跡』（富田林市遺跡調査会報告1）
富田林市遺跡調査会(1998)『喜志西遺跡』（富田林市遺跡調査会報告13）
富田林市遺跡調査会(2000)『喜志西遺跡Ⅱ』（富田林市遺跡調査会報告20）

図３　集落想定図
参考文献（府教委1994）所収図を元に作成

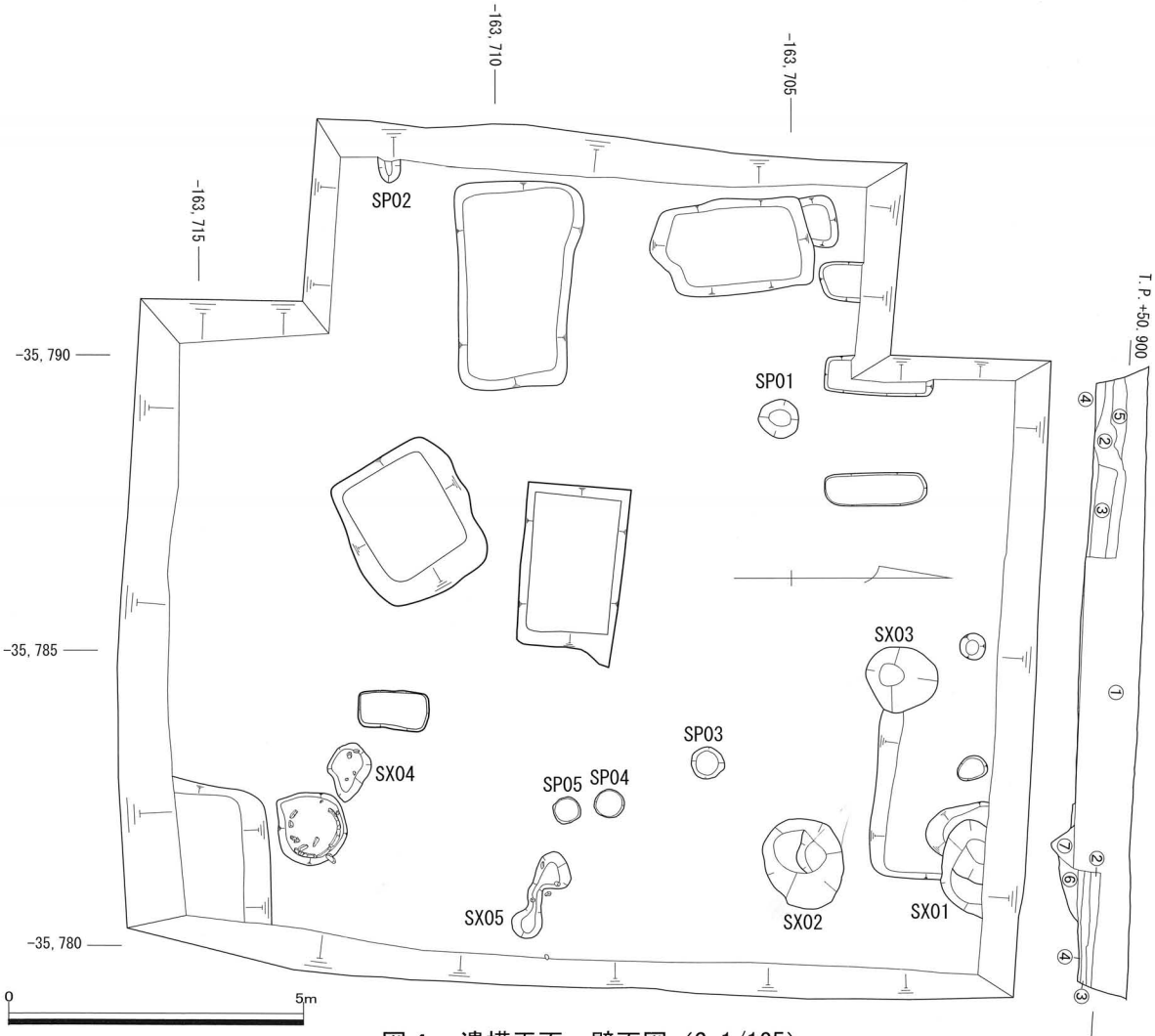

図４　遺構平面・壁面図（S=1/125）

報告書抄録

ふりがな	きしにしいせき
書　　名	喜志西遺跡　Ⅲ
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	富田林市文化財調査報告
シリーズ番号	46
編著者名	青木　昭和
編集機関	富田林市教育委員会
所 在 地	〒584－8511　大阪府富田林市常盤町1番1号　℡0721－25－1000（代）
発行年月日	2010（平成22）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きしにしいせき 喜志西遺跡	とんだばやしし 富田林市 きしちょうさんちょうめ 喜志町三丁目	27214	2	34° 31′ 24″	135° 36′ 37″	2010. 1. 13 ～ 2010. 1. 27	198. 4	民間共同住宅 建設に伴う

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
喜志西遺跡	集落跡	縄文～近世	ピット、土坑	土師器、瓦器、瓦	

写真２　調査区全景

2010. 3. 300